

確率的非巡回神経回路網のための並列相関学習法

5H-3

三谷 光照 大堀 隆文 渡辺 一央
北海道工業大学 電気工学科

1 まえがき

ゆらぎをともなう線形しきい値ユニット群からなる, 確率的非巡回神経回路網 (PFN Fig.1) のモデルとそのための並列相関学習法を提案し, 理論的検討を行ったので報告する.

2 ニューロンモデル

PFNを構成する各ニューロン k (Fig.2) は, (1) ゆらぎ発生源 $n_k(t)$ を有し, (2) 情報伝達諸量が入力パターン $x(p)$ によって変化するが, 一定入力に対しても期間的ゆらぎが存在する, ことをのぞいては McCulloch-Pitts のニューロンモデルと同じである. ニューロン k の $x(p)$ に対する情報伝達量は以下のように記述できる. ただし, $f\{\cdot\}$ は線形しきい値関数を表す.

シナプス前ニューロン群出力:

$$q_k(p, t) \in \{0, 1\} = q_k\{x(p), w, n(t)\} \quad (1)$$

入力総和: $u_k(p, t) = w_k^T q_k(p, t) \quad (2)$

瞬時活性化値: $v_k(p, t) = u_k(p, t) + n_k(t) \quad (3)$

瞬時出力値: $r_k(p, t) = f\{v_k(p, t)\} \quad (4)$

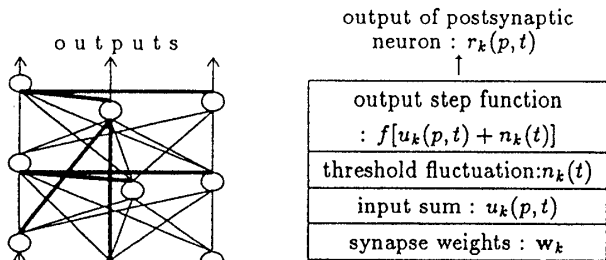


Fig.1 Probabilistic Feedforward NN

Fig.2 Model of a neuron k for PFN

3 確率的情報伝達機構

PFNの情報伝達量について離散時間確率系で考察する. あるパターンの入力期間中 (入力継続期間) におけるニューロン k の伝達諸量 $q_k(p, t)$, $u_k(p, t)$, $n_k(t)$, $v_k(p, t)$, $r_k(p, t)$ を確率変数として q_k , u_k , n_k , v_k , r_k で表し, 各確率変数の分布を $Q(q_k)$, $U(u_k)$, $N(n_k)$, $V(v_k)$, $R(r_k)$ で表す. ゆらぎに

条件1) パターン入力継続期間 T_p 内の小区間 T_s のゆらぎ分布 $N'(n_k)$ は, 微小な偏り (活性化値バイアス) ν_k を有していることを除いては, T_p 内のゆらぎ分布と等しい.

すなわち, $\nu_k \approx 0$, $\langle \nu_k \rangle_{T_p} = 0$, $N'(n_k) = N(n_k - \nu_k)$ を設定する. ここで, $\langle \cdot \rangle_{T_p}$ は T_p 期間の期待値を表す. 式(1)~(4)より, 伝達諸量の確率分布は, 以下の特徴, 関係を持つ. 以下, 時間変数 t , パターン変数 p , 期待値の期間 T_p を省略する.

$$V(v_k) = \sum_{q_k} Q(q_k) N(v_k - w_k^T q_k - \nu_k) \quad (5)$$

$$R(r_k = 1) = \sum_{q_k} Q(q_k) \int_0^\infty N(v_k - w_k^T q_k - \nu_k) dv_k \quad (6)$$

$$R(r_k = 0) = 1 - R(r_k = 1) \quad (7)$$

ニューロン出力 r_k は後続のニューロン j の入力ベクトル q_j を構成し, $S(j)$ を j のシナプス前ニューロン群の集合とすると, その確率分布 $Q(q_j)$ は, 次式で表される.

$$Q(q_j) = Pr\{r_k : k \in S(j)\} \quad (8)$$

Probabilistic Feedforward Neural Network and its Parallel Correlation Learning
Mitsuaki MITANI, Takahumi OOHORI, Kazuhisa WATANABE
Hokkaido Institute of Technology
Teine-ku, Sapporo, JAPAN

よって, PFNは式(5)~(8)に示した確率分布変換を繰り返し, 情報伝達を行っていると同様と解釈できる.

一方, 可視ニューロン群 S_v に対する平均出力誤差 $\langle e \rangle$ は, ζ_j を教師信号として, 次式で表せる.

$$\langle e \rangle = \sum_{j \in S_v} \{R(r_j = 1) - \zeta_j\}^2 = \sum_{j \in S_v} \{ \langle r_j \rangle - \zeta_j \}^2 \quad (9)$$

4 並列相関学習法

4.1 誤差最小化基本原則

パターン入力継続期間 T_p の平均出力誤差 $\langle e \rangle$ を, 各ユニット k への結合係数 w_k に関する最急降下法によって, 最小化する. 結合係数の修正量 $\Delta_p w_k$ は, 次式で与えられる.

$$\Delta_p w_k^T = -\varepsilon \frac{\partial \langle e \rangle}{\partial w_k} = -\varepsilon \frac{\partial \langle e \rangle}{\partial \nu_k} \cdot \frac{\partial \nu_k}{\partial R(r_j = 1)} \cdot \frac{\partial R(r_j = 1)}{\partial w_k} \quad (10)$$

4.2 誤差駆動項 $ED(k) = \frac{\partial \langle e \rangle}{\partial \nu_k}$ の推定

T_s 区間の平均出力誤差 $\langle e \rangle_{T_s}$ を ν に関してマクロリン展開すると次式を得る.

$$\langle e \rangle_{T_s} \approx \langle e \rangle_{T_s} |_{\nu=0} + \frac{\partial \langle e \rangle_{T_s}}{\partial \nu} |_{\nu=0} \cdot \nu \quad (11)$$

条件1より, $\langle e \rangle_{T_s} |_{\nu=0}$ は $\langle e \rangle_{T_p}$ と等しくなる. ここで, 式(11)の両辺に, 右から ν^T を乗じ, 期間 T_p の期待値を求めると,

$$\langle \langle e \rangle_{T_s} \cdot \nu^T \rangle \approx \frac{\partial \langle e \rangle}{\partial \nu} \langle \nu \nu^T \rangle \quad (12)$$

となる. ゆらぎに,

条件2) PFNでは, 各ニューロン内ゆらぎ n_k は, 互いに独立. を設定すると, $\langle \nu \nu^T \rangle = \text{diag}\{\langle \nu_k^2 \rangle : \forall k\}$ であり, 式(12)は次式となる.

$$ED(k) = \frac{\partial \langle e \rangle}{\partial \nu_k} \approx \frac{\langle \langle e \rangle_{T_s} \cdot \nu_k \rangle}{\langle \nu_k^2 \rangle} \quad (13)$$

4.3 局所可塑項 $LP(k) = \frac{\partial \nu_k}{\partial R(r_j=1)} \cdot \frac{\partial R(r_j=1)}{\partial w_k}$ の推定

$LP(k)$ は式(6)から次式となる.

$$LP(k) = \frac{\sum_{q_k} Q(q_k) N(-w_k^T q_k) q_k^T}{\sum_{q_k} Q(q_k) N(-w_k^T q_k)} \quad (14)$$

ここで, $N(\cdot)$ が分散 σ^2 を有する正規分布のとき,

$$N(x_0) = \frac{2}{\sigma^2} \int_0^\infty (x + x_0) \cdot N(x + x_0) dx \quad (15)$$

の関係を用いて式(14)を変形すると, 次式となる.

$$LP(k) = \frac{\langle r_k n_k q_k^T \rangle_{T_p}}{\langle r_k n_k \rangle_{T_p}} \quad (16)$$

4.4 学習則 (結合係数修正式)

式(10),(13),(16)から以下の簡潔な学習則を得る.

$$\Delta_p w_k^T = -\varepsilon \frac{\langle \langle e \rangle_{T_s} \nu_k \rangle_{T_p}}{\langle \nu_k^2 \rangle_{T_p}} \cdot \frac{\langle r_k n_k q_k^T \rangle_{T_p}}{\langle r_k n_k \rangle_{T_p}} \quad (17)$$

5 むすび

線形しきい値ユニット群からなる PFNモデルと, その学習法として, 平均出力誤差と活性化値バイアスとの相関, および, 局所可塑項からなる並列相関学習法を提案した. 理論的検討から, 本学習法は,

1. 線形しきい値ユニット群からなる PFNに所期の入出力特性を満たさせることが可能,
2. すべての結合係数を並列かつ同時に修正可能, などの特徴を有することが推論される. 今後, 性能支配要因や構造化学習について検討する.